特 227
488

平子・内田両家の
慶事を祝賀して

七福神と人生

始

特227
488

緒言

平子内田兩家の慶事に就いて、友人白石勝彦氏から、出雲の神の役を頼れ幸に諸事滯りなく濟みしに由り、何がな出雲の神にふさはしき方法で、祝意を表し度思ひしも、之れと云ふべき思ひ附きもなく今日に及びしが、偶々、嘗てロータリー會に於て、前後三回に亘り講演せし七福神説のことを思ひ出し、此際之を兩家の知己朋友の方々にお分ちして、共々祝福して頂いてはと氣付きたるに由り此に印刷して高覽を仰ぐ次第であります。

昭和八年五月

筆者しるす

目　次

平子內田兩家の慶事に就いて（卷頭）
七福神と人生
一　三サル長命論……一
二　三モチ長者論……一二
三　七福神是福長者長命論……二一
四　七福神是福と人生哲學……三〇

平子內田兩家慶事に就いて

本年二月二日平子內田兩家の慶事があつた。平子德右衛門氏長女松子孃に內田家三男岩吉君が婿養子として迎へられたのである。平子家は人も知る名古屋市に於ける舊家であるし、內田家は俵藤太秀郷の後裔で、江州內田の郷に住せしにより內田を姓とす、其後埼玉縣熊谷在花園村に移住し、維新前迄代々庄屋を勤めしと云ふ。されば兩家の家柄からして誠にふさはしき緣組である。又新郎岩吉君は、熊谷中學を卒業後、名古屋高等商業學校に入學し、優秀なる成績を以て昭和三年三月卒業し、現在白石勝彥氏の信任の下に東陽倉庫に勤務中で、性格頭腦共に申分なき人柄である。新婦松子孃は愛知縣立第一高等女學校出身の才媛で……結婚披露の席上で出雲の神の新婦讃美の言葉が足りないとて時の學校長たりし小林氏から抗議を申込まれたことほど左樣に稀なる才媛であ

る。されば此點からも誠に類稀なる良緣と云はねばならぬ。

新郎名は岩吉、新婦名は松子、岩に松、何となくうつりがよい、堅い〳〵永い〳〵契りを言ひ顯はして居る。名詮自性と云ふことがあり、姓名判斷が當るとすれば、岩に松、こんなに芽出たい緣組はあるまい。

婿入り婦取りおしなべて、婚嫁のことをトツグと云ふ。漢字では歸と云ふ字を書いてトツグと讀ませるのである。詩曰、桃之夭々たる、其葉蓁々たり、此子于(ユ)き歸(トツグ)ぐ、其家人に宜し。其意は、桃の盛に繁茂せるになぞらひて子孫繁榮のさまを述べて、婚儀の芽出たさを謳ふたものであるが、于(ユ)き歸(トツグ)と歸と云ふ文字を使ふて居る。解に曰、婚嫁は婦に行くのでない、婿に行くのでない、本來の我家に歸るのである。行くものは歸るが、歸つたものなら出て行く所がない筈であるとの意で、歸の字を使つたとのことである。我邦でも、婦や婿を送り出すと、鹽をまいたり箒で掃き出したりする習慣のある地方があるが、之れも同じ意義であらう。

して見れば、岩吉君は平子家に歸つたのである。元を正せばもと〳〵平子家の人であるが、何かの因緣で內田家に里子として育てられて居つたに、我家たる平子家の松子孃が年頃になつて、イワかイワかとマツて居ると聞いて、イワ歸つて來たのである。マツとし聞かばイワ歸へりこんと出雲の神がシャれる丈の道理がある。

岩に松、之れほど堅き契りはなけれども、出雲の神は念には念を入れて、新郎新婦の幸福が彌がうへにもいやまさんことを希ふて、左の文句を認めて贈つたのである。

聞說、室町時代崇三面大黑、即是辨天大黑毘沙門之三位一躰神也。今按勤勞人情義理是處世之三德而、大黑天者勤勞之神、辨財天女者人情之神、毘沙門天者義理之神也。故三位一躰神者、三德具備神之謂也。人若、勤勞以護職、人情以和人、義理以行道、則三德成就、應必到福神安樂之境矣。先哲欲由福神導世、

其意蓋深妙。

述福神之緣由以祝福

聞くならく、室町時代には三面大黑神を崇めたりと、即ち是れ辨天大黑毘沙門の三位一躰神なり。（顏が三面で身體が一）今按ずるに、勤勞と人情と義理とは是れ處世の三德にして、大黑天は勤勞の神、辨財天女は人情の神、毘沙門天は義理の神なり。故に三位一體神とは、三德具備の神とのいはれなり。人若し、勤勞もつて職を護り、人情もつて人に和し、義理もつて道を行ふならば、三德成就してまさに必ず福神安樂の境に到るべしとなり。先哲が福神に由りて世を導かんとし給ふ其意、蓋し深妙なり。

富者は人に贈るに財を以てす、仁者は人に贈るに言を以てす。富者に贈られたる財は、用ゆる所あれば盡くるも、仁者に贈られたる言は、用ゆる所あるも啻に盡きざるのみならず、用ゆれば用ゆる程其効驗を增す。今出雲の神は仁者に擬

ふて右やうの言辭を贈りたるが、希くは新郎新婦、行住坐臥に使用して、千代に八千代に共白髮、福神安樂の境に到らんことを期せられよ。

七福神と人生

一、三サル長命論

昭和五年暮名古屋ロータリークラブに於て

前回に、勝沼博士研究中の壽命論を我々一同イトも興味深く一語も漏らさじと謹聽致しましたが、講演が進むに從つて多數の諸君が段々心細くなつて來たと云ふやうな樣子でした。それは我々多數の者が短命の條件を遺憾なく備へて居るにかゝはらず、長命の條件は我々にはふさはしからぬやうな氣分がしだしたからでありませう。多數の會員諸君が心配顏しておられたやうに見受けましたから、今日私は何人にも出來る長命論を御聞に達し、聊かロータリー精神の社會奉仕を致したいと存じます。

三サルとは、金ケサル・色ケサル・勝ㄱケサル。

人生は金ケ・色ケ・勝ㄱケで浮世の歡樂を味ふことが出來るが、又之れが爲に思はぬ苦勞をして夭死するものも少くないのである。人は一の欲望體であると同時に一の精力體である。此の精力體は欲望の滿足に由りて發育せられ、

又消滅せられる。壯年期には、精力の補充が消滅に增さり、老年期には消滅が補充に增さる。精力を消滅し盡したる時に死が伴ふのである。欲望體としての人の欲望は無數であるが、其代表的のものは金ケと色ケと勝チケとである。金ケから所有欲が生れ、色ケから性交欲、勝チケから權力欲が生れる。金ケは本來第二次性のもので其根底は食ィケであるが、今の人間には先天性同樣のものとなつて居る。金ケから所有欲、所有欲に刺激されて人は經濟生活を營む。性交欲の爲に人は家庭生活を營み、家庭生活が延長されて社交生活に這入る。又權力欲から鬪爭生活やら政治生活に這入るのである。畢竟するに社會の三世相たる經濟・風俗・政治は金ケ・色ケ・勝チケの表現である。

生の意義は欲望充足の爲に活動するに在るし、死は精力の消盡を意味する。そして精力の消費なくして活動し能はぬは、船や汽車の運行に火力なり電力なりの必要なるに異ならぬ。それ故によく生きんにはより多くの精力の消費を

要し、より多くの精力の消費はより早く死に近づかしめると云ふことになる。人生に與へられたる精力の分量が同一なりとすれば、より多く人らしく生きればより早く死すると云ふことになる。之れが人生の矛盾性である。

爰に造化の妙とても云ふべきであらうか、人生に醒と眠との生活がある。醒の生活に於て失はれたる精力を眠りの生活に於て回復する。又醒の生活に於ても活動の變化に由りて休養し、休養に由りて精力を回復する。之れが生活の樣式に由りて壽命に長短ありと云はれる所以であらう。勝沼博士のお話に、樹を切り離したら、其中から飛び出した一疋のガマがずんずん成長し、生殖作用を營み、そして普通のガマの通りに死んだ。其樹の樹齢は貳百數拾年であり、其ガマが中途から飛込んだ形跡がないから、其ガマは樹齢に近い年月の間、安息狀態に生存して居つたであらうとの結論。又博士自身は古墳の棺中から得たる三四千年前のケシの種を培養し花を咲かしめた、其標本を今尙保存すと云はれる。

イカサマ浦島太郎の龍宮詣での昔話や、アーヴイングの描いたリツプ、ヴアンヴインクルの寓話も、彼等が長き間、夢の生活にあつたとすれば、アナガチに人生不可能事とも云へないであらう。科學の進歩に由り人間の保存法、人間の鑵詰法が案出されたなら、勝沼博士のガマ通りの年齢は愚か、我等は不死身の境遇に達するかも知れぬ。理論は簡單である、與へられたる精力を保存し得るならば、其保存期間中は死なぬであらう。然し生き甲斐があるか否かは別問題である。我輩の三サル長命論も、要は精力保存論に外ならぬ。

勝沼博士は、長命者は男子より女子に多い、其比率は一と二であると云ふ。其譯は女子は男子に比して、色ケは兎に角、金ケと勝チケとは少いからではあるまいか。又住所の關係からは、長命者は山間・海邊・小都會・大都會の順序であると。之は金ケ・色ケ・勝チケが少い所ほど長命者が多く、三ケの多い所ほど長命者が少い、即ち三ケと長命者は逆比例であると云ふことを示すにあらざる

か。又太つた人と痩せた人との壽命坂競走には、太つた人が負けて居るとの事であつたが、之は人肥えたるが故に短命なりとの謂にあらずして、太つた人は概して精力發散が旺盛で、金ケ・色ケ・勝チケ何れか若くは全部に精力を亂費する虞れがあるからではあるまいか。三サルの境に住し得たならば、人肥えたるが故に必ずしも危からずであるまいか。又宵張りの朝寢坊は短命なりとのお說であつたが、之は其責朝寢坊に非ずして宵張りにあるのであるまいか。只ボカーンとして宵張りは出來ないから、何れ金ケか色ケか勝チケで宵張りして短命の種蒔するのであるまいか。又カルタ遊短命、碁打將棋指短命のお說がありましたが、之は至極御尤のお說で何れにも勝チケが餘りに多くかゝるからであらう。特に賭碁、賭將棋に至つては勝チケに金ケが加はるから、一段と短命の種蒔になるでありませう。或西洋人が六十になつたらカルタ遊びをよした方がよい、然し一人遊は差支ないと云ふたと勝沼博士は話された。西洋のカルタ遊

びには勝チケの外に屹度金ケがかゝつて居る。それであるから年六十と云ふ下り坂の者には、カルタ遊は刺激が強よ過ぎる。然し一人遊びならば、金ケも勝チケもかゝつて居らぬから、さして精力を消費する虞れがないで、差支なしと云ふたのであらう。碁將棋と雖も三サルの境遇に住したる者には、何等差支あるまいと信ずる。現に仙人に碁盤はつきものではないか。名人上手になつたり、ならうとしたりするには、三サルの境に住せられぬから、壽命に差し障りもあらうが、ザル碁で一時間に五面も七面も打ち、負ければ頭をかき、勝てば鼻高々の程度なら、カルタの一人遊びに比すべきものであるまいか。一人で石を並べる代りに二人で並べる、勞力分擔の圍碁二人遊び。一人で一ザル、二人で二ザル、三人集れば三ザル。三ザル圍碁長命法、アナガチに不合理とは云ひ得ないであらう。

芝居好き、長唄謠曲の類は壽命延ばしとのお話。之れも御尤。金ケや勝チケに充ち〳〵て居つては、下手な長唄や謠曲をウナツて居れぬからである。之れ

とて、其道の人となつて、それで飯をくつて行かうとなると、勝チケ・金ケが加はるから、決して壽命延ばしにならぬであらう。芝居好きも、色ケの加はつた芝居好きは、除外せねばなるまい。私の知り合ひである或る病後の老人が、毎日歌一首づゝよむ、時には一日に十日分も十五日分もよむことがある。然しこんなことをして醫者に叱られはせんかと心配して居ると云ふた。其時に我輩は心密かに斯う思ふた、何れ唐人の寢言同樣の腰折れであらうから、日に何百首よんだとて壽命に差支はあるまいと。然し其後老人の歌は萬更腰折れ許りでないと知つて、ちと心配になつて來た。

我輩茲に一人の三サル翁を紹介したい。三サルとまでは行かなくとも、少くともそれに近い境遇に住し、百の坂には上らなんだが、それに近づいた一人の逸話をお話し致しませう。

それは私の生れ故郷に近き或る禪寺の和尚の話である。其和尚は若き頃は

至つて大兵肥滿の大和尙で、明治八九年頃、小學校が初めて開かれた頃にはその敎員になつたこともあつた。性恬淡磊落、其前半生は隨分の腥さ坊主、肉や肴は勿論のこと、酒はよし、女はよし、人生の歡樂は味ひ盡したと、後年和尙自ら語る。

私小學時代から二十幾年經過の後、其和尙に再び遇ふたが、全く別人の感あつた。先には大兵肥滿、今は長身痩軀、先には始末におへぬ腥さ坊主、今は見るからに有難さうなお坊樣。先には肉肴なんでも御座れ牛飲馬食、今は七年この方、ソバカキ一杯に梅干少々。先にはコツソリであつたが金も借り歩いたし女も圍うたし博奕もやつたが、今は金ケなし色ケなし勝チケもないと和尙は語る。それも其筈、和尙は其時は既に七十幾歳。

和尙晩年に圍碁を好む。若い時には面倒臭くて碁や將棋は大嫌ひであつたが、年を取つて見ると碁は仲々面白いものじやが、相手が少なうてさみしいわいと和尙は云ふた。事情を聞いて見れば相手の少いも道理あり。

我輩の圍碁にはマツタは付きものであるが、其和尙も亦マツタを平氣でやる。君子は過つて改むるに憚ることなし、改むるにマツタは必要であるとの理論から、我輩はマツタをする。和尙のマツタにも理屈がある、「生きたい〳〵は凡夫の願ひ、生かしたい〳〵は佛のなさけ、マツテ生きるものならマタツしやい」と和尙は云ふのである。イクラマツタしても和尙の手がきまつて居るから新手は出ない。死んだ石は矢張り死ぬ、スルト和尙曰く「アヽ矢張り死んだか、壽命ぢや〳〵、南無大聖釋迦牟尼世尊」。和尙は碁石を手にしながら時々居眠りをする。そうかと思ふと、思ひ出したやうに鍾つきに出かける。竹箒を手にして蜘蛛の巢を取りに行く。相手方がイヤになつて歸らうとしても仲々歸さない。御飯時ですから歸りませうと云ふと、「マー待たつしやれ、今御馳走が來る」と云ふ。何が來るかと思へば、ソバカキ一杯に梅干一ツ。

毎々碁の相手を仰せつかつて困りぬいた檀家の一人が、或る時和尙に「只で

は面白くないから賭碁をやりませう」と云ふた。和尚曰く「それは一段と面白からうが、何を賭けるか」「和尚さんはお布施の貰ひ溜をおかけなさい、私は何でも和尚さんの欲しいものをかけませう」と檀家は云ふた。

「欲しいものとて何にもないが、困つたなー、あゝよし〳〵、お前が負けたら己れの云ふ通りにならつしやい、わしが碁を打たうと云ふたらハイ〳〵モットと云ふたらハイ〳〵」

碁は始まつたが、和尚の碁はザルもザル、三ザルの碁であるから、和尚は負けた。和尚は早速納戸から手文庫を持ち來つて、「サアお布施の貰ひ溜持つて行かつしやい」と其檀家に渡した。開いて見れば中にはお布施の貰ひ溜が封の儘で一杯。其檀家の考へでは、一包か二包持つて來ることゝ思ひしに、全部然も餘りに澤山であつたので、アツケに取られて、「和尚さん、之をミンナ持ち歸つてもよー御座いますか」と、和尚曰く「アゝよいとも〳〵、何事も約束事じや」それでも尚ほ持ち歸り苦いので、「和尚さん、ソバカキ代は要りませんか」と尋ねたら、和尚の曰く「ア！ソバカキ代は要るが、まだソバ粉はある筈ぢや、コウして臭らつしやい、ソバ粉がなくなつたら使をやるから、ソバ粉一升提げて碁を打ちに來て臭らつしやい」と。檀家は其手文庫提げて歸つた。が、程なく和尚から使がやつて來た。ソバ粉入用に就き約束に從うて御出下さいとのことである。

其後毎日使が來るので其檀家はうるさき事に思ひ、ソバ粉一斗を使ひの者に渡して自分は行かなんだ。スルト間もなく使がやつて來て、「今日は不時の貰ひ物があつたから鳥供養をするから檀家總代として是非來て臭れ」とのことである。

餘りに度々の使でイナミ兼ねて行つて見たら、和尚は寺男と一所にソバ團子をコネ廻し、書苑の庭に澤山の烏を集め、ソバ團子を投げやつて、和尚は嘻々、烏はカア〳〵。

二、三モチ長者論

昭和六年春名古屋ロータリークラッブに於て

年の暮に聊か御機嫌取りの積りで三サル長命論を致しましたが、人間味のないことを云ふたとて、非難の聲もあつたとのこと。今日は年の始の會合故、三モチ長者論てふ人間味タッブリのお話を致し、新年の御慶芽出度申納度存じます。

三モチとは、金持、色持、力持であります。力持は結果から又勝ㄔ持とも申します。此三持は人間誰れ彼れの差別なく希ふ所で、三持になつた人を誠の長者と申して人からはうらやまれ自分は得意になるのであります。普通には金持のことを長者と申しますが、之は金持長者になれば女性にもて、色持になれるし、又人がペコ〳〵頭を下げて威張らして呉れて、相當の勝ㄔ持氣分にもなれるからのことでありませうが、誠の長者は三持具足、何れ一ッを缺いても其資格がない譯であります。

我邦津々浦々に至るまで、正月三ケ日は餅で祝ふ習慣になつて居ります。之は餅は音便で「持(もち)」に通ずるので、物持になりたい、然も一持ち二持ちでは足りない、三持ち長者になりたいとて、三ケ日つゞけて餅祝をするのでありませう。

士農工商それ〴〵祝餅の順序が違ふ。武士は元旦に力モチ、即勝ㄔモチ、二日に色モチ、三日に金モチ、百姓町人は元日に金モチ、色里商賣のものや、若い娘さん達は、元日に色モチ、我々教育者は子モチ、子モチは三モチの内にはないが、緣をたどれば矢張り色モチ。兎に角年の始め三ケ日餅を祝ふて三持長者たらんと、萬民擧つて努力生活を始めるのである。

萬民擧つて三持長者たらんとて、三餅祝をするけれども、年の暮になつて見れば、三持はさて措いて、一持長者にもなれないものが多い、乃て正月毎に緣起を繰り返し今年こそは、今年こそはと歳々年々モチ祝をするのである。

「色男金と力はなかりけり」之は色持の資格はあつても金持、力持になれない

とのこと。「シミツタレ女にもてる筈はなし」之は或る金持が色持になれなかつたことを云ふたもの。「角力取りマワシを質に傾城買ひ」之は天下の力士でも色持になるには金の工面が必要とのこと。「代議士さん、歳費引きあて借り廻はる」之は天下の勝ヂ持を誇る國家の選良も、金には緣遠いとのこと。私書生時代に「男がようて金持でそれで女がほれるなら、奥州仙臺陸奥の守に、なぜに高尾がほれなんだ」と云ふ俗謠が流行したことがある。金持勝ヂ持でも色持になれない場合のあることを云ふたのである。シェークスピアが、ヴェニスの商人に於て描けるシャイロックは、金持であつたが色持でも力持でもない。初代安田善次郎翁もそうであつたらしい。美人薄命と云ふが、薄命と云はるゝ美人は色持であつても、金持にも勝ヂ持にもなれないのである。

さりながら他の一面には、一持であつた爲に、三持になつた實例は少くない。女は氏なくして玉の輿に乘ると云ふたは、色持の爲に金持・勝ヂ持になること

を云ふたのである。唐の玄宗皇帝の妃になつた楊貴妃は其適例であらう。門閥政治の時代には、緣組に由りて出世が出來たものである。先づ色持になつて勝ヂ持・金持になるのである。封建時代には鎗一筋の手柄によりて榮達した。勝ヂ持になれは金持色持自由と云ふ譯である。越王勾踐吳を破つて歸れば、宮女花の如くに春殿に充ちたとある。勝ヂ持に色持が伴ふたのである。秦の始皇の阿房宮には宮女三千人とある。ナポレオンが、當時歐洲一の美人とうたはれたオーストリヤの皇女を迎へ得たは、彼れが歐洲第一の勝ヂ持になつたからであらう。秀吉が淀君を手に入れ得たも、彼れが太閤となり得たからであらう。今の產業時代は金持萬能の時代である。政黨内閣の出來た當時、大臣の椅子は百萬圓なぞ云ふ噂があつたが、其後、持參金が三百萬圓に値上げになつたなぞ云ふことも傳へられた。流言信ずるに足らねど、氣運がおい〳〵右樣なりつゝあるのであるまいか。兎に角、今の時代では先づ金持長者になると云ふことが三

持長者になる一番の近道である。

三持長者は人の理想である。萬民擧つて之れたらんと努力する。然し之には運命もあり機宜もあつて、願望成就は容易でない。只總べての條件が同一であるならば、金ケ色ケ勝ッケの三ケが強ければ強い程三持長者になる機會が多い譯である。金ケが強ければ金持長者になり易く勝ッケが強ければ勝ッ持長者になりやすいのである。そしてそれには貧乏人根性の足りない〳〵が必要である。タツタ百萬圓足りない、千萬圓欲しい。タツタ千萬圓足りない、一億圓欲しい。之が長者境入りの秘策である。

長壽長命も亦萬民の希ふ所、之には三サルの境に住すると云ふことが必要條件である。然るに三サルの境に這入らんには先づ長者氣分が必要である。金持長者の氣分になり、足りたと思へば金ケが去れる。我れは色持長なりと思へば色ケが去れる。三持長者の氣分になりすまし、三サルの境に入り乃て始て長

者長命を語ることが出來るのである。

三持長者論と三サル長命論とは矛盾でないか。矛盾でなくとも反對でないか。

人生は矛盾であり又反對である。生と死とは矛盾であり、反對であるが、然も生るものは必ず死す、因と果との關係になつて居る。榮枯盛衰は反對でありながら因果の連鎖でつながれて居る。人生は航海の如くに往航と復航とがある。往と復とは反對であるにかゝはらず、往く者必ず歸へる。往航の荷物と復航の荷物とは同一でない。人生往航の荷物は三持長者、復航の荷物は三サル長命と云ふのである。

長者には客觀的長者と主觀的長者の區別がある。誠の長者は客觀的長者を云ふので人生の努力もそこにあるが、之には誰も彼れもがなると云ふ譯には行かない。然し主觀的長者には、我れの心一つの持ちやうで誰れにもなれる。陋

巷にあつても顔回は長者氣分で居つた。

九尺二間の長屋でも、我れの心一つで宮殿の住心地がする。老いたれども女房一人あつて見れば、色持長者の氣分になれる。痩せても一家の主人枯れても一家の主婦、天井床下唯我獨尊、此に勝ヂ持長者の氣位がある。かゝる長者氣分は誰にも持てる。

三サルと三クヅシとを混同してはならぬ。三サルは三持でありながら、其の儘三ケを去るのである。三クヅシは三ケを去らずに三持を使ひクヅスのである。稗史の傳ふる紀の國や文左衞門の後半生は成金長者の金クヅシの適例である。成金者の後半世、金持長者の馬鹿息子は、得て金クヅシをしたがるものである。夏の桀王殷の紂王は最大の三持長者のモチクヅシである。我邦では殺生關白とうたはれたる秀長の生活はそれであつた。三サルは長命の秘策、三クヅシは社會的にも個人的にも短命の秘策。

社會的三長者クヅシは左傾的社會主義者に由りて企圖されて居る。資本主義の倒壞は金持長者クヅシ、性交自由主義は家庭生活の破壞・色持長者クヅシ。無政府主義は勝ヂ持長者クヅシ。露國ソヴエート政府は三クヅシ政體。故に我等は之を危險政治と云ふのである。

成金が金クヅシや色クヅシの生活を爲すは、社會主義者の提灯持をして自分等の墓穴を堀るやうなものである。

人生五十とは往航生活を云ふたものであるが、之は印度より來りし說ならん。我邦にては六十一歳を還曆と云ふ、之れ滿六十歳が往航の終りとの意義ならん。

人に由りては往航のみにて終るもの少なからず。特に偉人豪傑と云はるゝものは概して此種に屬す。成り金長者岩崎彌太郎、勝ヂ持長者ナポレオン第一世は此種の第一線に立つ。

太く短かくか、細く長くか、何れを選むべき。短命なれども內容豐富、人間味た

つぶり、往ける所まで往きついて行きあいバッたり、我豈に復航を意とせんや。

之れも一理。なれごも常道ならず。

常道は、往航と復航とに分ち、往航には三持長者、三ケに充ちて人間味タップリの積荷をなし。復航にはそれ等重荷をさらりとおろし、長者氣分で三サルの境に住し、福德圓滿如是安樂。太く然も長き生活を爲すにある。

三、七福神是福長者長命論

東久邇宮殿下名古屋ロータリークラッブに台臨の折の御前講演

宮殿下へ申上ます。言葉に上下を着せますと、舌が窮屈がつて御話しが致し苦う御座りますから、ドテラ言葉で御話し申上ることを御許し願いたう存じます。

昨年の暮、ロータリー最終のミーチインングで、三サル長命の御話しを致しました。三ザルとは、金ケサル・色ケサル・勝チケサル・人は兎角、金ケと色ケと勝チケの爲に、思はぬ苦勞をして若死を致します。往航年齡の間は、精力の補充が充分に出來ますから、金ケ色ケ勝チケ勝手次第でありますが、復航年齡に達すると、補充が不充分でありますから、三ザルの境に住すると云ふことが、長命最善の方策であると申したのであります。實は前に、勝沼博士が長命論を致されましたが、會員諸君の多數が、長命の條件にかなつて居らぬらしいとて、心配顏が多か

つたやうでしたから、私はだれにでも出來る長命策の積りで、其話を致した譯であります。然るに、之は以ての外の不評判で人間味のないことを云ふやつぢや、ロータリーの主義綱領に反しやしないかなぞと云はれたかも知れませぬ。

新年には御機嫌取りの積りで三モチ長者論を致しました。三モチとは、金モチ・色モチ・力モチ・即ち勝ッモチであります。新年三日我邦津々浦々迄、餅で祝ふ習慣になつて居ります。餅は持つに通ず、三日間續けてモチを食つて、三モチ長者にならうとのことであります。武士は元日は勝ッモチ、二日に色モチ、三日に金モチ。商人は元日に金モチ、若い娘さんや色里商賣の人は、元日に色モチ、我々教育者は元日に子モチ。子モチは三モチの中にありませんが、緣をたぐれば矢張色モチ、兎に角新年には三日續いてモチを食つて、三モチ長者たらんとして努力奮鬪生活を始める。年の暮には、長者になつて、長者氣分でモーよいと、金ケサル・色ケサル・勝ッケサル・三ザルの境に住し、安心立命して長命する。

人生航海の往航には三モチ長者たらんとして努力する。長者たらんには貧乏人根性の足りない足りないが必要である。長命ならんにはモー足りたモー足りたの長者氣分が必要である。金持であると思へば金ケが去れる。色持であると思へば色ケが去れる。勝ッ持であると思へば勝ッケが去れる。人生復航には三ザルの境に住して安心立命すべきである。

斯く御話致しました。して今日の演題は

七福神是福長者長命論

福の神は世界各民族共通の神。

何れの民族も福の神崇拜時代を經過す。

神話の最發達したるは希臘と羅馬、之はホーマーやヴァージルの如き大詩人

に由つて歌はれたるに由る。

福神の最發達したるは我邦、之は天臺眞言等の密敎徒が未來の應報と現世利益とを結び付けんとしたるに由る。

室町時代には、三面大黑と稱する三面福神が流行した。即金持の神である大黑天と、力持の神である毘沙門天と、色持の神である辨才天とが一體となりたる福神、即三モチ長者の神である。七福神の流行は德川時代である。七福神とは、夷子・大黑・辨才天女・毘沙門天・布袋・福祿壽・壽老人。

七福神の由來を尋ぬるなら、彼等は悉く舶來神、大黑は大國主命說あるけれど、實は毘沙門天・辨才天女と共に印度より渡來の神。布袋・福祿壽・壽老人は支那より渡來の神。支那の福祿壽は、福と祿と壽の三神であるが、我邦に來りては、福祿一神となり、外に布袋と壽老人の二神が加はつたのである。夷子は人王三十四代、推古天皇九年に、聖德太子が市を始めて賣買の術を敎へ、夷子の神を守

護神とし給ふたとある、して見れば、彼は七福神中最古參の神、然し彼れとても國產神との考證なし。然も夷の文字より判ずれば、外來神たることを名詮自性するにあらざるか。出來る丈國產的に解釋しても、蝦夷の神位のものなるべし。

七福神はいつ頃から我邦にもてはやされるやうになつたか。

文獻としては、海津長者物語りに、七福神の集團(マドイ)酒宴の物語がある。然し此物語の著者も年代も不明であるが、德川時代に、七福神寶船・七福神乘合船が市井にもてはやされ、其最盛なりしは元祿時代のこと、かなれば、七福神は德川時代の所產ならん。

天海僧正、德川家康に初見參の折に、土產として自畫自讃の七福神を贈呈したとのこと。又一說には見參の折に、家康が、佛イヂリをせずに極樂まうでの道なきやと尋ねたら、天海即座に紙硯を乞ふて、大幅に七福神を描き是福と讃して家康に示す。家康暫く之を眺めて、ア、分りました有難うと云ふたとある。

極樂は福の究み、七福神の境遇を兼ね併せたなら、是れぞ福の究み即ち極樂。七福神の描き方は繪書きに山りて意匠が違ふ。天海果してドンナ描き方をしたか不明であるが、最普通なるは、毘沙門天は甲を被り鉾を持つて居る、彼れは力持の神・勝ッケの神・惠美須は釣竿かついで鯛を抱へて居る、エビで鯛とて商人の神。大黒は米俵の上で肩に袋、手に槌を振り上げて居る、之れ農と工との神。惠美須・大黒併せて金持の神。金ケの神。辨才天女は琵琶を持つて居る、色に音樂はつきもの即ち色持の神。色ケの神。之れ等神々の德を兼ね併はすれば、金持・色持・勝持の三持長者。布袋・福祿壽・壽老人は長者氣分の長命者。惠美須・大黒・毘沙門・辨天は人生往航の神。之れでは足りぬ之れでは足りぬ、モット働けモット働け、之れ往航の神の氣位。布袋・福祿・壽老人は人生復航の神。琴歌に、そばに並びし福祿壽、長き頭をふり立てゝ、福はこちらへ祿は又、おはらの内へたつぷりと。やよまちたまへ我こそは、こんぢん身ぶんの初より、

何にくれとなくほねおりて、億萬歳をへたればこそ、今では樂な隱居かぶ、是ぞまことの壽老人。布袋は腹をかゝへつゝ、たからかにこそ笑ひける。是ぞ誠の復航氣分。人生、往航復航其宜しきを得て、七福神の境遇に住するならば、是ぞ福の究み即ち極樂。極樂何ぞ遠きに求めん、我胸三寸の中に在り。娑婆即寂光、煩惱即菩提。

秀吉は、天下持ちになりながら勝ち氣去り難く、朝鮮征伐を企てた。復航年齢に氣付かずに、聚樂邸を起して贅澤三昧に生活し、孫か彦かのやうな淀君を手に入れながら、それでも尙飽き足らずに、淀君に嫉妬心を起させるやうの行動に屢出でた。彼は三持長者でありながら、長者氣分になり難く、金氣・色氣・勝氣を去り兼ねて、遂に六十三歳で自分は終り、間もなく其家も亡びたのである。然るに、家康は天下持ちになつた後は、源氏の長者で滿足した。老いたりとの自覺に先つて、將軍職を秀忠に讓り、駿府に隱退して質素儉約に生活した。勝氣金氣を

去つたのである。彼れ果して色氣を去つたかドウカは私は知らぬ、彼れ子孫を誡むるに堪忍の二字を以てした。天下持ち長者になつて見れば、人と爭ふ必要なく、爭はなければ負ける氣遣いはないからである。長者でありながら長者氣分になれず、まだ足りない〳〵であせるから、金持長者がスカンピンになつたり、色持長者が女房に逃げられたり、勝ち持長者が城を枕に打死の憂目を見たりするのである。何事も堪忍〳〵、なる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍。それこそ長者の堪忍である。彼れ又知足安分を子孫に强調した。之れ等は總べて、七福神是福に由りて得たる家康の悟道であつたであるまいか。

家康は佛イヂリをせなんだが、毎元旦には、天海僧正より贈られたる七福神を、内書院の床にかけ、對座稍半時、默考したと傳へられる。平清盛は、頭を丸めて袈裟衣を身に着けた。足利義滿は金閣寺を北山に起し、義政は銀閣寺を東山に起して、共に佛イヂリをしたが、彼等は人生の惱みを超越し能はなんだ、極樂往生を

遂げなんだであらう。家康が十萬億土先きの極樂に行つたかどうかは知らねども、兎に角、現世では、是福・安樂の境に住し得たのは、是福・七福神の賜であつたであらう。私は名古屋ロータリーの諸君に進言したい。家康の故智に倣ふて、毎元旦には七福神を掲げ、正月三日間、餅を布袋腹になるまで夕べ込んで、ハヤ〳〵と三モチ長者になりすまし長者長命の秘策を講じ、ナゴヤロータリーアンはナガイロータリアンたられんことを偏に希上候。恐惶謹言

七、七福神是福と人生哲學

七福神竝び揃ふた境遇は是ぞ人生誠の幸福。晨には三持長者たらんとして三ケに充ち充ちて活動し、夕には長者氣分になりすまし三ケをさらりと打ち忘れて安らかに眠むる。醒むる日も醒むる日も同じことを繰り返しながら。そこに活動あり慰安ありて、人生の幸福をしみじみと味ひ得るのである。惠美須・大黑・毘沙門・辨天は三持長者活動の神。福祿・布袋・壽老人は長者氣分慰安の神。

人生哲學の始祖としては西洋ではソクラテス、東洋では孔子であらう。ソクラテスは人は無智の爲に不善を成すとの見地から、市井に出でて啓蒙に努力した。彼れの敎は歸納的で隨機說法の傾あれば、しか〳〵なりと言明し難きも、綜合的に言ひ顯はさば、七福神を打つて一丸としたやうのものと云ひ得る。彼れは三持長者を否定せぬ、又三サル長命を肯定する。普く人類をして三持長者たらしむると同時に三サルの境界に安住せしめたしとが彼れの希望であつた。

ソクラテスの門下が二派に分れた、一は快樂追求を人生の目的と說き他は欲情矯制が人道なりと說いた、三持三サル二派に分れた譯ぢや、此二派の潮流は近世に至るまで、繼承連綿、今尙ほ倫理學界の二大潮流として對抗して居るのである。之れに七福神を一纏めにし三持三サル適應宜しきを得たる究竟圓滿なる生活を人生の目的とする自己成就說を加へて、現代倫理思潮の三大學派と云ふのである。

何れの學說が優れたるかを判斷せんには、勢ひ人生の起原に遡らねばならぬ。ドウして人間が出來たかと云ふ問題を究はむれば自然人生の目的が何んであるかゞ判明する譯である。然るに此問題に就いては哲學者はサジを投げて居る。近世哲學の泰斗と呼ばるゝカントすら、神の存在、靈魂の不滅、意志の自由の

如き問題は、論理のカケ橋が及ばぬから、理性で判斷することが出來ぬと云ふた。今の人間は生殖本能でドシ〳〵製造さるゝけれども、原始第一の人間はドウして出來たか、キリスト教の舊約全書に說ける如くに、天地創造の神の細工であらうか、そうとすれば先づ神の存在を假定せねばならぬ。然るにそれは論理的に證據立て能はぬ。然らば佛教の假定の如くに、人生は無始無終永劫の存在なりと云はんか、之れには靈魂の不滅が前提である、けれども之れ亦論理的に證據立て能はぬ。要は人間の起原に就ては哲學は其力及ばぬとがカントの意見である。

進化論者は人間の先祖は猿であり其大元は混沌たるアミーバーであると云ふ。然し其アミーバーは何から來たかを說明し能はぬ。理性批判の行きつまりは悟性批判即ち信念の出發點である。哲學の行きつまりは宗教の出發點である。宗教家は人生の起原に就いて何と語るであらうか。

佛教は大小二乘に分れ、大小共に幾多の宗派に分れて其說く所同じからず。今其最も共通的と思はるゝは起信論に說ける眞如緣起說である。

一切の有情皆本覺の眞心あり、無始より已來常住す。或は之を眞如と云ひ、又佛性と名付け、又如來藏と名づく。成佛の正因を備ふる故に佛性と云ひ、藏の如來或は如來の藏なるが故に如來藏と云はれるのである。斯る眞如に、無始際より妄想之を翳して自ら覺知せず、耽染して貪瞋痴の三毒の煩惱を起して、生死の海に入ると說くのである。

此所說を平たき言葉で云ひあらはすならば、斯うである。人は佛性を具へ無始より已來存在して居る。其本然の狀態を眞如と云ふ。眞如は磨かざる玉に喩ふべきか、或は佛の種子とでも云ふべきか、此眞如にふとして無明の雲がかゝりて、貪瞋痴の三毒の煩惱を起した。貪はホシイ〳〵、食い氣を始めとして、諸ろ〳〵の欲氣、即ち金ケである。瞋はニクヤ腹立たしやで即ち勝ッケである。痴

はイトシヤ可愛やで即ち色ケである。此三ケを起した爲に、人は生れたり死んだりする。人生の航海に旅立つたのである。人は欲の凝りであると云はれるに人の欲は無數である。釋迦も百八煩惱と云ひ、又八萬四千の塵勞とも云ふたが、其根本は貪瞋痴の三毒金ケ色ケ勝ケの三ケであつて、三毒三ケの爲に人の生活が始まつたのである。して見れば、人生の目的は三ケの滿足即ち三持長者たるに在りと云ふことになる。

キリスト教は神が天地を創造し、最後に塵芥からアダムの形體を造りて神の息を吹き込んで魂となしたと說く。又アダムの肋骨を拔き取りてエバを造つたと云ふ。して見れば第一原始人のアダム・エバは神の子である、神性其儘で彼等はエデンの園に無心の生活をして居つた。佛教に所謂眞如の存在やうなものであつたであらう。然るに偶エバが蛇に瞞されて、禁斷の木果を食ひたいとの欲を起した。蛇に瞞されたは無明の雲に覆はれたのである。食いたいとの欲は即ち貪欲である、金ケの始である。神怒つてエバと蛇の末裔に怨恨を植え付けた。貪瞋痴の瞋即ち勝ケの種が値え付けられたのである。エバ爾は夫をしたうて懷姙の苦勞を知るであらうと宣告された。貪瞋痴の痴情色ケの種が植え付けられたのである。「アダム爾は額に汗して食ひ遂に土に歸らん」と死の宣告を受け、エデンの園から逐はれた。斯くして人間生活が始まつたのである。要はキリスト教の天地創造說に從うても矢張り人間生活の出發點は貪瞋痴である。食ィケ色ケ勝ケの三ケが人間生活の始である。之をキリスト教では根本罪惡と云ふて、救世主にすがり、速に贖罪して天國に歸へらんことを教義とするのである。

佛教も亦三毒の煩惱即ち三ケを根本罪惡視する。佛になり得る種子が迷ひ出したは之れが爲であるからである。乃て小乘教では三毒三ケ退治を根本義とする。肉食妻帶の禁止も葷酒不入山門の掟も總べて之れが爲である。然も

之れが極端に走りしは阿羅漢道である。斷食は愚か文字通りの粉骨粹身遂には灰身滅智、身體を灰にし知力を滅ぼして空に歸するが誠の涅槃なりと信ずるに至つた。

三毒三ケは人の人たる所以である。然るに小乘敎は之を斷たんと努むる、恰も敵の城廓に宿りながら敵を亡ぼさんとするもので、先づ自己を亡ぼしてかゝらなければ敵を亡ぼすことが出來ない譯である。羅漢道には二重の矛盾がある、一は彼等は佛性に歸らん爲に三毒三ケを絶たんとする。絶ち得たならば果して元の佛性に歸るであらうか。一たび芽生して枝葉が出たり花が咲いたりしたものが、今更枝葉や幹を切り去つたとて元の種子に歸り得るとは思はれぬ。又假りに不可思議の効力で元の種子に歸り得たとした所で、其種子は佛性に過ぎない、彼等の目的とする佛果ではない。佛性には又々何時無明の雲がかゝつて、折角斷ち切つた三毒三ケが現はれるかも知れぬ。之れが小乘敎の行き詰り

大乘敎の出發點である。

大乘敎は不斷煩惱得涅槃と云ふ、三毒三ケ其儘で佛果が得られると云ふのである。又煩惱即菩提とも云ふ、煩惱を淨化すれば其儘で菩提となると云ふのである。煩惱即菩提の謂れは如何に？、食ィケ金ケから利の觀念が生れ、利の觀念に刺戟されて人は經濟生活を營む。經濟生活の當相は勤勞である。額に汗するのである。勤勞は生存道德の第一義である。釋迦は雪山檀持山に於て勤苦六年已れを磨き上げた。龐公と云ふ人は己が所有する一切の財產を海に投じて笊造りをして生活したと禪話の中にある。勤勞の德を體驗せん爲である。或る惰ケ者が、私が人間一の幸福者になつた畫を描いて下さいと寺の和尙に賴んだら、和尙はヨシヨシと云ふて、其男が山のやうな重荷を負ふて山坂を上る畫を描いてやつたとのこと、最大勤勞が最大幸福であるとの意義である。石部金吉は金兜を造り、二三百兩の金を貯へた。一夜盗賊押し入りて有金全部を持ち

去つた。彼はさぞかし悲んで、仕事も手につかぬであらうと彼れの友人が尋ねて見たら、彼は平氣で一生懸命に働きながら答へた。金は取られたが働き道具は何にも取られぬ。若しも私の働き心を持ち去られたら、それこそ大變であつたと。彼れに於ては貪欲が勤勞と淨化したのである。金ケが働ケとなつたのである。金ケは煩惱であるが働ケは菩提である。

色ケは煩惱であるが淨化すれば情ケとなる。情ケは菩提である。それは色ケから愛の觀念が生れる。先づ夫婦の愛、親子骨肉の愛、之れが元となつて人は家庭生活を營み社交生活を營む。一片の戀愛が家庭生活や社交生活に由りて淨化されて、慈悲人情となるのである。佛は最大の色ケ者色持長者である。彼は一切衆生を戀するからである。彼れの戀は煩惱でなく菩提である。

勝ケから宜の觀念が生れ、宜の觀念を實現せん爲に人は政治生活を營む。人は總べて勝ケ氣に刺戟されて鬪はんとする。自然に任せ措いたなら、人類は

鬪死鬪滅するであらう。乃で宜の觀念が生れ出るのである。總べての人の勝ケを滿足する最善の方法は、出來る丈鬪爭を避くるに在る。鬪はなければ貧ける氣遣が無いからである。社會の秩序宜しきを得て、人々皆義理を辨へて、始めて社會の平和が實現する。斯る目的で人は政治生活を營むのである。秀吉と家康とが小牧山で戰ふた。戰半ばにして和睦した、戰ふて宜しきを得るよりも、和した方が遙に宜しきを得るであらうと彼等が信じたからである。我等の勝ケは、已れ丈宜しきを得んとするのであるから煩惱であるが、之れが淨化されて、萬民をして各其宜しきを得しめんとするに至つては最早煩惱ではない。佛の勝ケは十方衆生の罪障に打勝つて、彼等を悉く助けんとの願望であるから、勝ケは即ち助ケである。キリストは人類の根本罪惡を購はんとて十字架上に上つた、最大の勝ケであり、最高の助ケである。煩惱即菩提である。金ケ色ケ勝ケは其儘では無論煩惱である。三ケから生れ出た利宜愛の三觀念は

善惡無記の中性であるが、之等三觀念實現の爲に生れ出たる勤勞人情義理は德性である。經濟生活には勤勞、社交生活には人情、政治生活には義理。斯くあつて始めて人類共存共榮の實が擧げ得られるのである。勤勞人情義理は人類生存上の根本道德である。釋迦やキリストの勤勞は不撓不屈の大勇である、彼等の人情は博愛であり大慈大悲である、彼等の義理は大整大和大智である。然も元をたゞせば貪瞋痴の三毒、金ケ色ケ勝ヂケの三ケに外ならぬ。煩惱即菩提とは之を云ふたのである。金ケ色ケ勝ヂケが働ケ・情ケ・助ケになるのである。

斯くして七福神を觀ずるに、惠美須・大黑は金ケの神であつて又働ケの神である。大黑は米俵の上に頭巾を被つて槌を持つて居る。上を見ず脇見をせずに一生懸命に働く勤勞の神である。惠美須も亦釣竿肩に鯛を抱へて居る姿は、正しく勤勞の神である。辨財天女は色ケの神であつて又情ケの神である。手にしたる琵琶は、色の取持もするであらうが、妙音人心を和げ人情の美を語る。

彼女は正しく人情の神である。毘沙門天は勝ヂケの神であるが又助ケの神である。彼れの鉾は勇猛に敵を亡ぼすが又味方を助ける。善に組して惡を斥く、彼は正しく義理の神である。

釋迦は佛道に往相廻向と還相廻向ありと說く。往相廻向は自ら佛と云ふ大福長者たらんとしての努力を云ひ、還相廻向は佛と云ふ大福長者になりすまし、十方衆生を已れ同樣に大福長者たらしめんとの誓願を云ふのである。キリスト敎に、キリストの復活を云ふが復活のキリストには還相廻向の意義がある。

キリストの神は天地萬物の主宰である。釋迦の佛は十方佛國の所有者である、共に無限大の金持長者。キリストの神は博愛の神、釋迦の佛は大慈大悲、共に是れ無限大の色持長者。キリストの神は大自在力、釋迦の佛は光明無量壽命無量共に是れ無限大の勝ヂ持長者。

再び七福神を觀ずるに彼等を往相廻向の神々と眺め得べく、又往相還相兩廻

向の神々に分ち得べし。往相廻向の神々と見る時は、毘沙門・辨天・惠美須・大黒は大福長者たらんとする努力の相、福祿・布袋・壽老人は既に大福長者となつて滿悅の相。往相還相に分つ時は、惠美須・大黒・辨天・毘沙門は往相廻向の神々、福祿・布袋・壽老人は還相廻向の神々である。福祿は長き頭をふりたて、布袋は大きなお腹を抱へつ、壽老人は額に億萬歳の皺をたゝへつ、人間皆さん斯くあらまほしと我等を廻向濟度するものと見られるのである。

大乘敎では又娑婆即寂光と云ふ。人間擧つて七福神の境遇に住し得るならば娑婆即寂光ではあるまいか。又即身成佛即心即佛と云ふが三毒の煩惱が三德の菩提となつて見れば、此身は此儘佛ではあるまいか。此心が此儘佛であるまいか。淨土門では彌陀賴む信の一念で即得往生とて極樂詣でをすると云ふが、彌陀の光明に照らされて無明の雲が晴れて見れば、最早凡夫でない、佛の仲間であると云ふのである。

眞の神や佛がドンナ姿をして居るか我等は之を描き能はぬ。神を牛が描いたら、牛の姿に描くであらうし、馬が描いたら馬の姿に描くであらうと或人が云ふた。我等人間が、神や佛を描くとしたら七福神以上に描き得るであらうか。

人間の起りが三毒三ケでありとすれば一人の神を描いては其意を盡し得ぬ。生あるものは必ず死すとは云ひながら、死にたくないが生あるもの、常である。悉達太子の發菩提心も生老病死の苦を脱れんが爲ぢやと傳へられる。して見れば七福神を始めて描いた天海僧正は、宗敎の極致即ち人生究竟の願望を最も巧妙に繪筆に顯はしたと云ふべきであらう。

三サルと三持とは矛盾でない相即である。絕對の金持長者に金ケのあらう筈はない。「富者の天國行は駱駝の針の穴を通ふらんより尙ほ難し」とキリストは云ふたとある。之は金ケの失せぬ富者を云ふたので、金ケの臭味のない誠の金持長者なら天國行は保證付きである。地獄太夫が一休に、色を賣り乍ら佛

になれますかと尋ねたら「アー成れるとも、ナンなら已れが今宵一夜抱いて寢て見てやらうか」と答へたとやら。まこと抱いたかドウかは知らぬが、色ケあつての色賣りは障りになるが、色ケ去つての色賣りは差支ないとのことである。金ケ離れた金持が、金を溜めながら極樂往生出來ますかと尋ねたら、一休は「アー出來るとも、ナンなら己れが其金を持つてやらうか」と答へるであらう。三ケの去り難いは貧乏人根性が失せぬからである、長者氣分になれぬからである。神や佛は絶對の三持長者である、彼等に金ケや色ケや勝ッケがあらう筈はない。我等凡夫も亦三持三サルの境に住し得たならば、釋迦何人ぞ我れ何人ぞ、煩惱即菩提、即心即佛、娑婆即寂光、圓融無碍。

「追て書」のこと

松坂屋に景氣直しの爲にとて七福神展覽會が開かれた。(昭和六年二月一日より一週間) 數ある出品の中で特に我輩の注意を惹いたは、鋼製の七福神乘合船の鑄物であつた。船の舳先きには毘沙門天が衝立つて海上を睨んでゐる。如何にも勝ケの神とも航海の守護神とも見られる。甲板とも云ふべき所に惠美須・大黑・辨天の集團がある。大黑と辨天とは座つて何か語り合ふて話がうまく纏つたか二人ともにこついて居る。多分色ケか金ケの話であらう。惠美須は私は一寸座をはずして鯛でも居るか見て來ませうと云ふやうな樣子で、後ろ向きに立つてクス〳〵笑の顏付きで水面をのぞいて居る。船の客間とも見るべき所に福祿と布袋が碁を打ち壽老人が見物して居る。一人で一ザル二人で二ザル三人で三ザル如何にも三サル長命の碁打らしい。

船は人生の航海に擬したもの、七福神は人生航海の內容。人生航海の最も圓滿幸福な

るは三持長者、三サル長命、長者長命七福神是福なることを諷刺せしならん。

昭和六年六月十日印刷
昭和八年六月十五日發行
【非賣品】

著作兼發行人　渡邊龍聖
名古屋市中區陶生町二ノ二三
印刷者　塚本守男

終